

御影Aが初栄冠



写真左から1部優勝の御影A(右端は井戸監督)と2部優勝の神戸FC・C

2部優勝は神戸FC

神戸市少年リーグ

昨年の5月から、兵庫区の少年グラウンドなどで行われていた53年度神戸市少年リーグは12月27日、1部(小

学男子6年生以下)の決勝を迎え、後期リーグ1組と2組の1位同士が対戦。1組の御影Aが2組の東灘Aを破って初優勝した。そのあと閉会式に移り、河本春男・神戸市協会長から河本杯が、また2部(小学男子4年生以下)優勝の神戸FC・Cと3部(小学女子)優勝の八多には、それぞれ玉井杯がおくられた。

御影Aは御影小の少年でつくられているチ

- 順位 ▶ 1部(小学男子6年生以下) ①御影A、②東灘A、③神戸FC・A、④成徳A、⑤蓮池A、⑥北五葉、⑦板宿、⑧箕谷B、⑨千歳A、⑩箕谷A、⑪渦森、⑫鶴越、⑬ひより台A、⑭神陵台A、⑮高倉台A、⑯桜の宮A、⑰東灘B、⑱和田岬A、⑲多井畑A、⑳神戸FC・B、㉑御影B、㉒垂水SS、㉓名倉B、㉔高倉台D、㉕丸山A、㉖丸山B、㉗名倉A、㉘多井畑B、㉙ひより台B、㉚神戸SS、㉛蓮池B、㉜鶴越B、㉝高倉台B、㉞高倉台C、㉟北須磨、㊱多井畑C、㊲神陵台B、㊳千歳B、㊴和田岬B、㊵神戸YMCA・A ▶ 2部(小学男子4年生以下) ①神戸FC・C、②成徳B、③箕谷C、④ひより台C、⑤高倉台E、⑥鶴越C、⑦東灘C、⑧桜の宮B、⑨多井畑D、⑩神戸FC・D、⑪蓮池C、⑫神戸YMCA・B、⑬成徳C、⑭鶴越D、⑮千歳C

神戸市少年リーグを終えて

神戸市協会少年委員長 田上由雄

神戸市少年リーグは昨年の4月30日、御影公会堂で行われた閉会式で始まり、グラウンド不足や、約400にもなる膨大な試合消化など、いくつかの問題を抱えながらも無事終了いたしました。まず、この紙面をお借りして、少年サッカー育成にご尽力いただきました方々に、心からお礼申し上げます。

この1年を振り返ってみると、チーム数が多く試合消化のためのリーグ運営に追われ、子供たちが楽しく、また正しいサッカーができる環境を作ってやれなかったことが残念でなりません。少年サッカーの底辺は確実に広がっており、熱心な指導者も増えてきています。しかし、子供たちの技術がそれに比例して伸びているかというと、そういうわけでもありません。

子供たちの技術の問題と、サッカーの環境とは決して切り離して考えることはできないと思います。底辺が厚くなれば、子供たちの技術が自然に伸びるというものではなく、協会の組織とか競技会のあり方、会場の問題、審判技術やリーグ運営、母集団の育成などに、多くの努力を払わなければなりません。私たちはチーム数が増えるにつれ、組織を拡充し、少年公認審判員の養成、指導者講習会、選抜チームの編成、パークスキームなど、種々の試みを展開してきました。しかし、ここでもう一度、しっかりと足元を見つめ、いま何をしなければならぬかを、考えなければいけない時期に立っているように思えます。

神戸の少年サッカーは弱いといわれます。

私はこの言葉を聞くたびに、神戸のサッカーの中に矛盾を感じ、また責任を感じますが、心配はしておりません。私たち指導者の「少年を大切に育てる」情熱は他の地域と比べても、ひけをとらないし、少年たちをどのように指導すればよいかにについても、理解しているつもりだからです。

サッカーマガジンに連載中のワールドクラスへの道——「世界」へ悠々(ゆうゆう)と急げ——の中で、大谷四郎氏は「ガッツ」とか激しさを条件にするのではなく、大切なのはいいセンスをもっていることで、それが第一条件にならないと、日本のサッカーはだめだ」「指導者がどんなサッカーをやらそうと思っているかが問題だ。どういう練習をやるかは、どのようなサッカーをやらせようとしているかで決まってくる」

(サッカーマガジン52年10月10日号)と書いておられます。

まさにその通りで、特に少年の場合、パワフルよりも、よりスキルフルに、ガッツよりも、より的確な判断力を身につけさせることが、優先されるべきなのです。どんな場面でも、ボールが自分の思うままに扱え、一度取ったボールを次に生かせる少年を育てることが大切です。

神戸の少年サッカーは、確かに良い成績は残していませんが、しかしそれは指導法の問題ではなく、外界からの刺激や交流が少なく、社会人、大学、高校、中学、少年といった一貫した指導によるつながりも薄く、運営資金の不足等、組織や運営の問題によるところが非常に大きいのです。私たちは、このことについてもっとよく考え、話し合い、一つひとつの問題を早急に解決し、すばらしい素質を持った少年たちを育てるために、文字どおり世界へ悠々と急ぐてはありせんか。

今後とも、皆様方の温かいご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

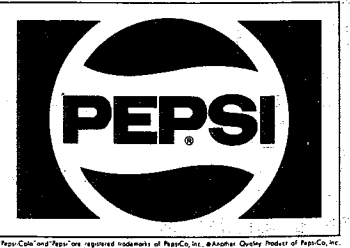
ームで、リーグに参加したのは51年。井戸監督が仕事のかたわら熱心に指導し、初年度から上位の成績をおさめていた。今年のチームは、体力的にすぐれた選手が多いが、ボール扱いもうまく、後期リーグは5戦全勝で、合計得点が18に対し失点を0に抑えた。決勝の東灘Aとの試合であげた4点も、相手バックスを完全にくずしてからのすばらしい得点だった。

健闘むなし18位
清水大会の神戸市少年選抜

神戸市少年選抜チームは12月25日から28日まで、静岡県清水市で開かれた第6回清水招待全国大会に出場した。大会は全国各地から集まった24チームが、4グループに分かれて予選リーグを行い、そのあと順位決定戦を争った。神戸市少年チームはCグループで1勝4敗の成績で5位となり、17-20位を決める順位決定戦では、京都紫に勝ったが、そのあと西淡津井に敗れ18位に終わった。

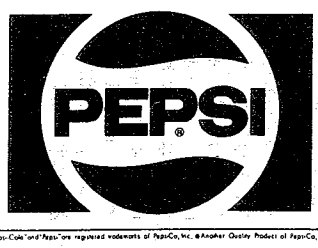
志賀守コーチの話 神戸市チームは少ない練習回数にもかかわらず、力いっぱいぶつかった。しかし、ほとんどの選手が全国レベルの試合に参加するのは初めてで、他チームの技術の高さに驚いたようだ。それでも2試合目の橘キッカーズ戦あたりからは、早いチェックと意図的なフォローができるようになり、また確実に早いボールコントロールの必要性がわかったせいか、マークされながらも落ち着いたプレーをみせた。

清水のチーム、西日本選抜の高い個人技は、神戸の選手たちに大変よい参考になったが、神戸では少年用の狭いグラウンドで試合をしているためか、長い距離のボールがけれない。そのため、相手の後ろへ出したつものパスが、簡単にカットされる。最近、ボールコントロールにすぐれた選手が多くなっているが、スピードのある正確な技術を要求しなければならぬと思う。



個人購読のご案内

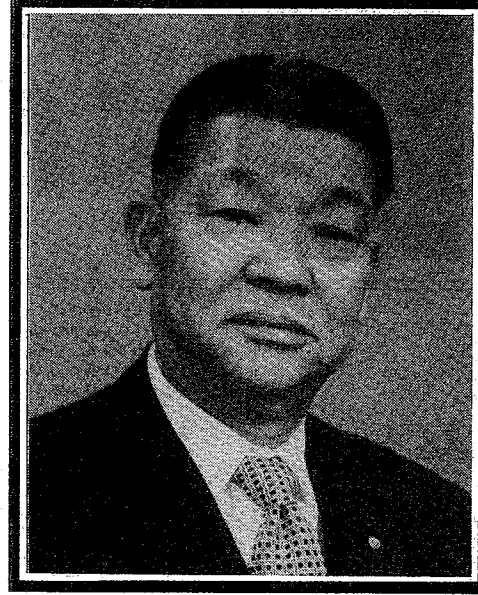
弊紙を個人で購読ご希望の方は、1年分として50円切手12枚を同封のうえ、次のところへお申し込みください。
〒657 神戸市灘区上野通6丁目3-12
加藤 正信 ☎078 (861) 3100
なお、数人分をまとめて申し込まれる場合は、割引がありますのでご連絡ください。



月刊 神戸のサッカー

1979 2月号
発行所 神戸市サッカー協会
神戸市北区有野台7丁目16-6
〒651-13 ☎(078)981-5867
発行人および編集人 加藤 正信
神戸市灘区上野通6丁目3-12
〒657 ☎(078)861-3100
毎月10日発行 購読料1部20円

玉井操氏が死去

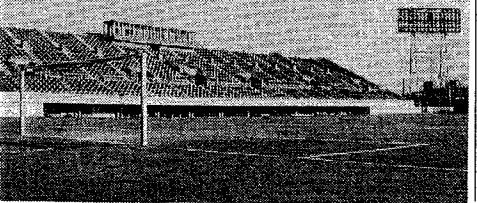


兵庫サッカー
“育ての親”

神戸市サッカー協会と兵庫県サッカー協会の名誉会長、ならびに関西サッカー協会会長の玉井操(たまいまさお)氏は53年12月23日午前8時35分、神戸市生田区の神戸救済会病院で死去した。その1週間前に、75歳の誕生日を迎えたばかりだった。原因は急性心不全。玉井氏は玉井商船の社長、また神戸市商工会議所副会頭を昭和39年から14年連続つとめなど、神戸・兵庫の発展に力を尽くしてきた。

明治36年12月16日、東京生まれの玉井氏は生がいサッカーにかけた人でもある。大正11年、早稲田高等学院に進み、ビルマ人のモン

世界のプレーヤーが絶賛する神戸中央球技場。だが玉井氏は、超満員のスタンドを見ることはなかった



25日に決勝戦
兵庫県高校新人大会

53年兵庫県高校新人大会は2月11日から25日まで、県下の32代表が参加して争われる。神戸市高校新人大会を兼ねて行われた神戸市予選は、1月27日の決勝で須磨が御影工を下した。試合は須磨が積極的な攻撃で主導権をにぎり、CF石川のシュートで先取。そのあとも一点を加えた。御影工は全国選手権大会の関係で調整が遅れたうえ、故障が相次いで2位に甘んじた。神戸代表は須磨、御影工

チョウ・ディン氏の指導を受けた。玉井氏は中心とする早稲田は、12年から始まった全国高校ア式蹴球大会の第1、2回に連続優勝。そのあと早稲田大学で主将をつとめた玉井氏は、昭和2年上海で開かれた第8回極東大会に、日本代表選手として参加。日本が国際試合で初勝利をあげた立役者になるなど、華ばなしい選手生活を送った。

早稲田大学を卒業して神戸に帰ってからは、神戸一中(現・神戸高)や御影師範(現・神戸大)のサッカーを指導し、戦前の「サッカー王国」を築く。戦後は日本協会の副会長、関西協会の会長として、東京オリンピックの推進に貢献する一方、兵庫県サッカー協会、神戸市サッカー協会の会長をつとめた。サッカーの普及振興に当たり、特に神戸中央球技場の建設には、先頭に立って尽力した。

このほか「昔のようなサッカー王国をつくらう」とサッカーを愛する1007人を集めて、昭和38年12月に「サッカー友の会」を発足させた。また、子供好きの玉井氏は、少年たちが体が大きくなっても元気がないのを案じ、サッカーで体を鍛えようとして、数々の業績を残している。その足跡が大きかっただけに、突然の死は関係者に深い悲しみを与えた。

趣味は囲碁、謡など幅広い。表立ことはきらいだが、私心のない面倒見のいい人といわれ、綿密な計算をたてて、誠心誠意よく人柄は万人の認めるところだった。

「サッカー王国をもう一度…」

玉井操氏をしのぶ

昨年の暮れも迫った12月23日の朝、神戸市サッカー協会名誉会長・玉井操氏の死去が伝えられた。75歳だった。終生変わらぬ情熱をサッカーに傾けた玉井さんが、いまは亡い。

神戸市サッカー協会は以前、神戸市体育協会の加盟団体の一つとして、競技・運営を担当する役員だけは何とか整っていたが、しっかりした下部組織はなかった。それが47年2月6日、神戸市内のサッカーチームが王子児童文化会館に集まって総会を開き、名実ともに組織化された神戸市サッカー協会が生まれた。

初代会長には玉井さんをお願いしようとしたが、当時玉井さんは日本協会の副会長と関西協会の会長の要職にあり「そのような方を神戸市協会の会長にはとて…」と遠慮する声が、一部に聞かれた。しかし、快く引き受けていただいた玉井さんは、私が理事長をやめる50年3月までの3年間を会長として、さらに引き続いて名誉会長を務められた。

玉井さんは会長就任と同時に「神戸・兵庫のサッカーを戦前のように強くしようじゃないか。そのためには、サッカーをもっと市民に広め、サッカー協会の組織を充実することだよ」と力説された。普及の一環として、神戸市民ならだれでも参加できるレクリエーションリーグを、これまで毎年開いており、また広くサッカー仲間の手を結ぶために、本紙「神戸のサッカー」を発行してきた。

組織の面では、協会が創立し

た時から、青少年委員会と施設委員会が特異な活動を展開した。ふつう、少年、中学生、高校生の各委員会を設ける場合が多いが、神戸市協会ではこれらを一本にまとめて青少年委員会とした。また、施設委員会は競技運営のためのグラウンド調整だけでなく、施設の建設に力を置いた。しかし現在では、これらの委員会の活躍が目立たない。

施設といえば、神戸中央球技場の建設運動における、玉井さんの努力を忘れてはならない。「神戸にサッカーを普及させるには、国際試合や日本リーグを開催できるりっぱな競技場がぜひ必要だ。それも収容人数が数千人程度ではダメで、最低でも2万人くらいの規模がほしい」と、政財界の幅広い交遊を背景に、関係先へ働きかけられた。苦しい予算の中で照明設備が整ったのも、玉井さんの尽力に負うところが大きい。だが、外国の一流プレーヤーが世界的なグラウンドだと絶賛する中央球技場も、45年8月ポルトガル・ベンフィカと日本代表の試合で、スタンドがほぼいっぱいになった程度で、あとは満員になることはなかった。関古鳥のなくスタンドが、玉井さんの目にどのよう映っていたかと思うと、申し分ない気持ちで胸がつかまる。

神戸・兵庫に「サッカー王国」を再建すること、それが玉井さんに対するせめてものご恩返しになる。思えば、惜しい人を失った。

(神戸市協会副会長・加藤正信)

戸大)のサッカーを指導し、戦前の「サッカー王国」を築く。戦後は日本協会の副会長、関西協会の会長として、東京オリンピックの推進に貢献する一方、兵庫県サッカー協会、神戸市サッカー協会の会長をつとめた。サッカーの普及振興に当たり、特に神戸中央球技場の建設には、先頭に立って尽力した。

